

人間と福祉・平和思想

担当教員 未定

配当年次 2年

単位区分 選択

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考 平成29年度は閉講。

【授業のねらい】

第二次世界大戦による歴史的現実との対決から現代世界は生まれました。その代表的な一例を、ドイツのヴァイツゼッカー大統領による戦後40周年演説に見て、その演説を正面から一緒に読み解きます。そして大きな二つの主題を引き出して、以下に示す講義内容へと展開します。「知ったかぶり」でもなければ「知らん振り」でもない、対象と自己意識との正確な対応を「知」として認める「知的良心」に資する核心を形成できます。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	I-1 テクストの再構成1 ヴァイツゼッカー演説を読む ①「終戦は敗戦か解放か」という問題提起
2	I-1-2 「にも拘わらず解放」という論理の急旋回（学習過程としての戦後40年間）
3	I-1-3 ヨーロッパにとっての第二次世界大戦＝当事者能力喪失一歩寸前、米ソによる欧州分断
4	II-1 テクストの再構成2 ホロコーストとの対決、ヴァ演説の独自性、パラダイムとシンタックス
5	II-2 知の否認の後に：罪と責任の生成、罪の伝統的二分法
6	II-3 作為の罪と不作為の罪、その非対称性の現状と克服という現代的課題
7	III-1 映画の現実「シンドラーのリスト」「戦場のピアニスト」「アーメン」（日本未公開）
8	IV-1 古典の復権：半世紀後の哲学者ヤスパース著の概念的豊穡さ
9	IV-2 対概念の形成と定義付け、「学問の瞥見」
10	IV-3 作為と不作為の非対称性の克服へ
11	V-1 人間とは何かに対する解答例1
12	V-2 人間とは何かに対する解答例2
13	V-3 近代的人間観の全体像
14	VI-1 平和と人権、福祉と介護責任の原理を求めて、もうひとつの作為へ
15	VI-2 平和と人権、福祉と介護責任の原理を求めて、不作為の支援へ

【履修上の注意事項】

人間の作品としての言葉に向かい合う、そして、自分の頭脳を使って考えるという訓練をしますので、集中して受講する態度を望みます。予習復習には教科書を活用して、質問を繰り返してください。

【評価方法】

毎回の感想文＝30点、レポート＝10点、定期試験＝60点。

【テキスト】

山本 務、熱田一信編著『ハンセン病・葉害問題 プロジェクト 作為・不作為へ』（本の泉社）
R. ヴァイツゼッカー著、山本務訳著『過去の克服・二つの戦後』（NHKブックス705、日本放送出版協会）。

【参考文献】

カール・ヤスパース著『戦争の罪を問う』（橋本文夫訳、平凡社）他、講義中に適宜、教示。

保健社会論

担当教員 嶋 政弘

配当年次 2年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

- ① 現在の保健医療問題（高齢化の進展、国民医療費の増大、医療技術の変化、健康観の変化など）の実態と問題発生要因について理解する。
- ② 保健・医療・福祉の専門職とその役割について理解する。
- ③ 保健医療問題の解決に社会がどのように取り組んでいるか理解する。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	保健社会学とは何か。健康をどのようにとらえるか。
2	保健社会学の対象と方法。どのような健康問題にどのような方法で取り組むのか。
3	疾病構造はどのように変化し、人々の健康観はどのように変化しているのか。
4	保健行動とは何か。
5	患者（利用者）と保健医療従事者の関係、とくに患者と医師関係を中心に関係性をみる。
6	看護師と保健師の役割とは何か。
7	地域保健医療のシステムとそのあり方を巡る課題は何か。
8	保健医療問題と患者・住民の関わりをみる。
9	家族の変化に伴って介護・看護サービスはどのように変化してきたか。
10	医療供給の仕組みとそこに所在する問題とは何か。
11	ヘルスプロモーションの考え方とは何か。どのように発展してきたか。
12	わが国と諸外国のヘルスプロモーションの取り組みはどのようにになっているか。
13	健康都市づくり運動の展開とは何か。
14	保健社会学の課題と展望を地域の健康問題から探る。
15	まとめと確認

【履修上の注意事項】

健康問題は高齢化、国際化、技術革新などに伴って益々多様化してきている。そこで日常報道される健康問題の内容には関心を払ってもらいたい。

【評価方法】

- ① レポートやミニレポートを頻回に行う予定なので、出席を心がけること。
- ② 評価の方法は、レポート20%、試験80%の割合で行う。

【テキスト】

使用しない。資料は必要に応じて配布する。

【参考文献】

授業の中で提示する。

福祉環境工学

担当教員 西島 衛治

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

学生は、ノーマライゼーションに基づく環境整備の方法にバリアフリーがある。高齢者や障害者が社会参加し、自立できる生活環境を整備するための方法を学ぶ、特に在宅をこれからの地域福祉の基点にするため、地域との関連性についても考えられるようにしたい。

【授業の展開計画】

要介護高齢者や障害者の住環境のバリアフリーの方法を学習する。また、都市の公共的施設建築のバリアフリー技術を学ぶ。なお、福祉住環境コーディネーター検定試験の基礎的学習ができる。

週	授 業 の 内 容
1	障害と障害者の基本的動作寸法について学習する
2	障害を考えた建築計画の基本について学習する
3	バリアフリーの基本的設計方針について学習する
4	福祉用具と住宅改善について学習する
5	住宅のバリアフリーについて学習する
6	アプローチ、出入口の計画について学習する
7	駐車場、動線（廊下等）の計画について学習する
8	水まわり（便所、洗面、浴室）の計画について学習する
9	居室の計画について学習する
10	設備の計画について学習する
11	要介護高齢者対応の住宅計画について学習する
12	住宅のバリアフリーのケース・スタディについて学習する
13	バリアフリー住宅の見学（または、設計事例の紹介）
14	車イスなど福祉用具の住環境での使用体験を行う
15	これまでの講義内容について総括的に議論する

【履修上の注意事項】

【準備学習】事前に講義テキストを予習し記録する（120分）【課題等に関するフィードバック】講義内容を記録し、不明な部分を調べる。記録を図化や表に整理する。（120分）【その他のアドバイス】講義の中でノートの作成方法を指導する。そして、講義内容を理解できる内容に構造化する。結論の整理を箇条書きにする。理解できない場合、講師に質問する。

【評価方法】

1. 定期試験や中間理解度確認試験による評価（60%）
2. 予習・復習の自主的学習態度の確認（20%）
3. レポートによる評価（10%）
4. 講義における質疑応答状況（10%）

【テキスト】

西島衛治編著「ユニバーサル・バリアフリー検定 3級公認テキスト」一般社団法人 ユニバーサル・バリアフリー協会、2015年7月発行（税別1000円）及び配布資料：制度や用語の変更などに伴う正誤表配布

【参考文献】

西島衛治編著『高齢者・障害者を配慮した建築設計チェックリストと実施例』理工図書、福祉住環境コーディネーター2級公式テキスト」東京商工会議所

福祉情報の保障と管理

担当教員

配当年次 4年

単位区分 選択

準備事項

備考 平成29年度は閉講。

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

東洋福祉論

担当教員 金 蘭九

配当年次 3年

単位区分 選択

準備事項

備考 平成29年度は閉講。

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

- 1 東アジア諸国（日本、中国、韓国）の福祉戦略を理解する。
- 2 日本の福祉政策を理解・評価し、また同時に、あるべき方向性を検討する上で、国際比較研究は重要なツールとなる。
- 3 福祉政策は幅広い分野を対象とするが、主に介護保障（制度）に焦点をあてる。
- 4 将来の社会福祉士として、ローカルな実践に加え、グローバルな視点をもった発想や提案を試みる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	オリエンテーション、東洋社会と福祉文化・福祉オリエンタリズム
2	I 第二次世界大戦前の社会事業 1 隣保相扶を中心とした時代
3	2 世紀転換期の動き
4	3 国家介入による救済形態へ、社会事業の盛衰
5	II 第二次世界大戦後の社会福祉 1 占領期の社会福祉
6	2 高度経済成長期の社会福祉
7	3 社会保障運動の発展
8	4 福祉元年と1980年代の動き
9	III 新しい社会福祉の動き 1 社会福祉計画化の時代
10	2 社会福祉基礎構造改革以降の動き
11	IV 社会福祉の思想および政策の流れ 1 日本の社会福祉の歩みから
12	2 中国の社会福祉の歩みから
13	3 韓国の社会福祉の歩みから
14	4 韓国の福祉文化・福祉戦略
15	V アプローチとしての福祉社会・市民社会

【履修上の注意事項】

授業前に資料（プリント）などを読み、キーワードについて調べてくること。
授業後に復習しておくこと。

【評価方法】

定期試験60%、レポート20%、発表20%で評価する。

【テキスト】

毎回、資料（プリント）などを用意し、配布する。

【参考文献】

社会福祉士養成講座編集委員会編『現代社会と福祉』第4版（中央法規、2017年）。
厚生労働省編『（平成28年版）厚生労働白書』（ぎょうせい、2016年）。

社会福祉特講Ⅱ

担当教員 西島 衛治、森 信之、吉岡 久美、河谷 はるみ、隈 直子

配当年次 2年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

「高齢者等への情報支援」と「地域でのボランティア実践」という2つのコースに分かれ、通常の教科とは異なった内容の講義、演習、実習（実践）を経験して、福祉実践の視野を広げ、地域で活動する力を強化する。

【授業の展開計画】

「高齢者等への情報支援」（15回の講義分担）

- 第1回 「オリエンテーション・高齢者等への情報支援と生きがい情報士」（西島）
- 第2回 「情報支援のためのインターネット技術」（森）
- 第3回～第6回 「高齢者就業の現状」「課題」「対策」「支援」（河谷）
- 第7回～第9回 「ライフプラン」「作成技術」「支援」（吉岡）
- 第10回～第13回 「高齢者の余暇の現状」「問題点」「余暇支援」「支援技術」（隈）
- 第14回 「地域参加に向けた広報技術」（未定）
- 第15回 「高齢者等の地域参加支援技術」（未定）

「地域でのボランティア実践」（全15回を西島が担当）

- 第1回 「地域の福祉活動、NPO法人を調べる」
- 第2回 「NPO法人の活動内容を把握する、ディスカッション」
- 第3回～第7回 「NPO法人等の活動に参加する」
- 第8回 「活動参加に関する報告」
- 第9回 「地元における就労支援活動、NPO法人を調べる」
- 第10回 「NPO法人の活動内容を把握する、ディスカッション」
- 第11回 「NPO法人等の就労支援事業に参加する」
- 第12回 「作業内容を把握し、個別支援計画について学ぶ」
- 第13回 「個別支援計画に沿った支援について学ぶ」
- 第14回 「活動参加に関する報告」
- 第15回 「全体報告、振り返り」

【履修上の注意事項】

「高齢者等への情報支援」コースにおいては、ライフプランの作成演習、パソコンを使った情報検索の実習、情報支援計画の作成演習を含む。各回の講義テーマに対して、テキストに沿った予習・復習が求められます。なお、15回の学習は「生きがい情報士」の受験資格のための科目として利用できます。

「地域でのボランティア実践」コースでは、事前学習の後、ボランティア活動を実践し、活動経過、結果を報告にまとめることが必要です。

【評価方法】

「高齢者等への情報支援」コースでは試験(70%)、提出物(30%)で評価する。

「地域でのボランティア実践」コースでは、事前学習結果、ボランティア活動の記録、活動に対するNPO等からのコメント、ボランティア活動の報告書によって評価する。

【テキスト】

「高齢者等への情報支援」コースでは「生きがい情報士養成テキスト」（健康・生きがい開発財団編）を使用する。「地域でのボランティア実践」コースでは、必要の都度、参考資料を作製し配布提供する。

【参考文献】

①高齢者福祉に関する資料、地域福祉に関する資料 ②NPO法人に関する本、ジョブコーチに関する本、障害者福祉・雇用の法規や制度に関する本、個別支援計画に関する本

学校ソーシャルワーク演習

担当教員 古閑 智子

配当年次 3年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 演習

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

この演習では、学校が抱えるさまざまな課題を知り、スクールソーシャルワーカーが学校においてどのようにソーシャルワーク実践を行うべきかについて学びます。子どもたちが抱える状況を把握するためのアセスメント方法、支援計画の立て方、ケース会議の方法、関係機関との連携等、学校ソーシャルワークのさまざまな支援方法を学んだのち、「自分がスクールソーシャルワーカーならどうするか」という意識をもちながら、実践事例を通して支援を考え、課題を抱えた子どもたちへ適切な支援が行えるようになることを目指します。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	スクールソーシャルワーカーの仕事
2	スクールソーシャルワーカーの専門性
3	学校ソーシャルワーク実践の導入
4	学校ソーシャルワークの支援方法
5	アセスメントの展開
6	支援計画の展開
7	学校ケースマネジメント、チームアプローチの理解
8	ケース会議の展開
9	関係機関との連携：学校外資源の活用
10	関係機関との連携：地域に根差した実践、協働システムの構築
11	記録の在り方、スーパービジョンについて
12	事例検討＜児童虐待、非行、不登校＞
13	事例検討＜特別支援教育、貧困家庭、精神疾患＞
14	事例検討＜接近困難な事例、コンサルテーション事例＞
15	まとめ

【履修上の注意事項】

皆さんはこれまでに何らかの形で「学校」とかかわりを持ってきました。その体験的学校論を生かしながら授業に参加してください。学校ソーシャルワークの役割や活動内容についてイメージを図ることが大切です。授業に参加するに当たっては、事前にテキストの該当する章を読み、授業中適宜提示される課題に真摯に取り組むようにしてください。

【評価方法】

1. 課題レポート 50% 2. 発表等の受講態度 30% 3. 授業終了時に適宜提示する小課題 20%

【テキスト】

「ハンドブック 学校ソーシャルワーク演習 実践のための手引き」門田光司・鈴木庸裕編著 ミネルヴァ書房

【参考文献】

「スクールソーシャルワークのしごと」門田光司・奥村賢一著 中央法規

学校ソーシャルワーク実習

担当教員

配当年次 4年

単位区分 選択

準備事項

備考 平成29年度は閉講。

開講時期 第1学期

授業形態 実習

単位数 2

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

外国書講読

担当教員 未定

配当年次 3年

単位区分 選択

準備事項

備考 平成29年度は閉講。

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

購読する論文などの詳細については、開講時に教示するが、現代における生と死に関わる古典的な論文（英国、ジョナサン・グラバー）を「作為と不作為」の観点から読めるようになる。併せて、言語と思考の対応を、新しい概念「テーマとレーマ」の観点から解明し、聴講者は実践演習に取り組める。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	テーマ「作為と不作為」の導出（ドイツ・ヴァイツゼッカー演説に即して）
2	言語と思考：パラダイムとシンタグマ
3	「作為—不作為—教義」の伝統的な強固さの諸源泉について
4	作為と不作為に関する、現代の二大問題（ホロコーストと原爆投下）
5	作為と不作為の非対称性に浸透された現代人からの脱却を目指して
6	不作為の諸形態
7	不作為の罪の重さを測る秤りを作為の罪へと比べてきた伝統について
8	他者支援の作為という論理空間の探求 1
9	他者支援の作為という論理空間の探求 2
10	他者支援の作為という論理空間の探求 3
11	言語活動と思考活動の連動：テーマとレーマ 1
12	言語活動と思考活動の連動：テーマとレーマ 2（冠詞の使い分け・選択という教育内容の創出）
13	法と倫理の区別の根拠：カントとヘーゲルの場合
14	社会的な諸出来事を「作為と不作為」の視点から手繰り寄せる実践教育 1
15	社会的な諸出来事を「作為と不作為」の視点から手繰り寄せる実践教育 2

【履修上の注意事項】

予習として、各人が論文内容に対して自分なりの理解によってまず向き合う。次いで、分かる個所と分かりにくい個所とを分別するという、基本的な勉学態度を形成。その意味で、各人の発表という形式を採用することもある。また、参考文献の使用も適宜、推奨するので、おおいに活用することができる。

【評価方法】

そのつどの授業時での「発表」を30点、レポートを20点、定期試験を50点という配点とする。

【テキスト】

- Jonathan Glover:Causing Death and Saving Lives(Penguin Books)
- 山本 務、熱田一信編著『ハンセン病・薬害問題 プロジェクト 作為・不作為へ』（本の泉社）

【参考文献】

講義のなかで適宜、教示する予定。

統計学

担当教員 森 信之

配当年次 3年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

社会調査やアンケートなどで得られたデータは、そのままでは役に立たない。データを客観的、論理的に分析することが必要になってくる。本講義では、確率論の基礎知識を踏まえた上で、データを分析する手法や手順、得られた結果の評価方法等を、なるべく多くの事例に関する演習を通して実践的に理解し、得られたデータから適切な分析手法を選択し、データ分析ができるようになることを目標とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	質的データと度数分布表・ヒストグラム
2	量的データと代表値、分散
3	正規分布、t分布、 χ^2 乗分布とその性質
4	母平均・母分散・母比率の推定
5	検定の考え方、第1種・第2種の過誤
6	母平均の検定、対応のある2つの母平均の差の検定
7	対応のない2つの母平均の差の検定
8	ノンパラメトリック検定（順位和検定）
9	ノンパラメトリック検定（符号検定）
10	ノンパラメトリック検定（符号付き順位和検定）
11	母比率の検定（対応のある場合、ない場合）
12	適合度の検定、独立性の検定
13	イエーツの補正、マクネマー検定
14	相関関係と相関係数
15	回帰分析

【履修上の注意事項】

テキストはなく、配布プリントを配布するだけなので、事前の予習、事後の復習が要求される。特に、わからないことは、わからないまま済ませずに、遠慮なく質問に来るようにしてもらいたい。

【評価方法】

筆記試験の結果で判断する。再試験は行なう。

【テキスト】

テキストは用いず、適宜、プリント資料を配布する。

【参考文献】

講義中に、適宜、紹介する。

社会調査演習／実習

担当教員 竹中 健

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 演習

単位数 2

【授業のねらい】

社会福祉士や介護福祉士などの専門家が地域福祉計画や障害者計画などの地域の計画立案を担うことが多くなってきているが、その基礎となるのがニーズ把握や地域の実情の把握である。本授業では、実践的なデータの収集や住民・関係者の知識や態度や行動に関する情報の収集手段としての実践的調査手法を学習する。また、収集したデータの処理や分析・解釈についても実習を通じて習得する。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	オリエンテーション
2	社会調査の概要
3	調査テーマの検討・文献探索の手法
4	調査テーマの確定
5	調査内容の検討 (1)
6	調査内容の検討 (2)
7	調査内容の検討 (3)
8	調査対象の検討および選定
9	実地調査 (1)
10	実地調査 (2)
11	調査票の分析前の処理・データ入力
12	データ処理・入力データのチェック
13	調査結果の整理・分析 度数分布表作成
14	調査結果の整理・分析 クロス集計表作成。・図表作成
15	調査報告書の作成

【履修上の注意事項】

調査はチーム活動になるので必ず出席するように心がけること。
分担して作業を進めることになるので、自分の役割を明確にして協力的態度で授業に臨むこと。また、調査実習に関わる項目について事前および事後学習に努めること。

【評価方法】

授業中の態度、グループワークへの積極性を評価し、実習の成果物としてのレポート提出を求める。
実習中の態度姿勢 20%、レポート 80%とする。

【テキスト】

とくに使用しない。

【参考文献】

必要に応じて授業中に指示する。

心理学研究法

担当教員 山住 賢司

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

本講義では、科学的な学問としての心理学を成立させている心理学独自の研究法について、その基礎を学ぶ。「実験法」「質問紙法」「観察法」「面接法」といった主要な研究法についての理解を深め、それらの知識を実験や卒業研究において活用できるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	ガイダンス：心理学とは何か
2	心理学の研究とは何か
3	心理学研究法の特徴
4	観察法
5	面接法
6	質問紙法
7	S D法
8	心理検査法
9	精神物理学的測定法
10	実験法
11	仮説とその検証：構成概念と観測変数
12	実験計画入門
13	実験計画と統制
14	準実験と単一事例実験
15	研究の倫理

【履修上の注意事項】

「心理学基礎実験Ⅰ」「心理学基礎実験Ⅱ」を履修する学生は、本科目を履修しておくこと。
欠席が多いと単位取得資格を満たせないことを理解しておくこと。

テキストは毎回必ず持参すること。

事前学習として各回の内容についてテキストの該当部分を確認しておくこと。

また講義終了後に、各回の配布資料の内容をテキストで確認し復習すること。

【評価方法】

レポートの得点100%で成績を評価する。

【テキスト】

「心理学研究法」 大山正・岩脇三良・宮埜嘉夫(著) サイエンス社 2005

【参考文献】

「心理学研究法入門 調査・実験から実践まで」 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦(編)
東京大学出版会 2001

心理統計学基礎

担当教員 山住 賢司

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 4

備考 当該科目は2年次第2学期から3年次第1学期までの開講科目。

【授業のねらい】

心理学研究において必要とされる、主用な統計解析技法について学ぶ。統計学の基本的な考え方に始まり、平均・分散・相関といった記述統計や、母集団モデルに基づく推測統計などについて、実際にデータ分析演習を交えながら理解を深め、それらの知識を活用できるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

1～15回までは2年次第2学期に、16～30回までは3年次第1学期に行う。

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	心理学と統計学	16	多重比較の各種の方法
2	度数分布表とグラフ	17	確率モデルの基本的な考え方
3	代表値と散布度	18	統計的推測で用いられる確率分布
4	データの分布に関する指標	19	母相関係数に関する検定
5	相関	20	区間推定
6	回帰分析	21	要因計画の導入
7	正規分布	22	2要因分散分析の基本的な考え方
8	母集団と標本	23	2要因分散分析の例
9	統計的仮説検定とは	24	2要因分散分析における交互作用の分析
10	独立な2群の平均の差の検定	25	単純主効果の検定の例
11	対応のある2標本の平均の差の検定	26	被験者内1要因分散分析の基本的な考え方
12	各種の t 検定の例	27	被験者内1要因分散分析の例
13	3標本以上の平均の差の検定：分散分析入門	28	度数データの検定
14	分散分析の基本的な考え方	29	順位データの検定
15	1要因分散分析の例	30	多変量解析入門

【履修上の注意事項】

「心理学基礎実験Ⅰ」「心理学基礎実験Ⅱ」を履修する学生は、本科目も併せて履修すること。
講義に加え、データ分析課題や小テストなども随時行う。
欠席が多いと単位取得資格を満たせないことを理解しておくこと。テキストは毎回必ず持参すること。
事前学習として各回の内容についてテキストの該当部分を確認しておくこと。
また講義終了後に、各回の配布資料の内容をテキストで確認し復習すること。

【評価方法】

定期試験の得点80%、データ分析課題・小テスト20%とし、これらの合計得点で評価する

【テキスト】

「新心理学ライブラリ14 心理統計法への招待－統計をやさしく学び身近にするために－」
中村知靖・松井仁・前田忠彦（著）サイエンス社 2006

【参考文献】

「心理統計学の基礎」 南風原朝和（著）有斐閣 2002
「Excelで学ぶ統計解析」 涌井良幸 ナツメ社 2003

心理学基礎実験 I

担当教員 山住 賢司

配当年次 2年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 実験

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

心理学は心を科学的に研究する学問であり、その過程において実験や調査などを通じてデータを収集し、分析を行い、論理的に考察を進め知識を深めてゆく。主観的なデータではなく観察可能な客観的データに基づく科学的研究方法について、心理学の主要な分野での実験を実際に体験し学んでゆく。正確なデータを得るための実験手続きやデータの統計的な分析評価方法について理解するとともに、科学的なレポートを書けるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

履修者を少人数のグループに分け、グループ単位で下記課題を行なう。
原則として各実験課題は、①方法説明、②実験実施、③結果の処理と解析、④レポート提出の順に進める。
各回は2時限連続で行ない、次々回までにレポートの提出を求める。

週	授 業 の 内 容
1	心理学基礎実験の意味と心得、レポートの書き方
2	ミュラー・リヤーの錯視
3	大きさ知覚
4	触二点閾の測定
5	レポート評価・指導(1)
6	体積重さ錯覚
7	仮現運動
8	ポッケンドルフ錯視
9	社会的促進
10	レポート評価・指導(2)
11	線引き課題におけるフィードバックの効果
12	鏡映描写による両側性転移
13	自由再生法による記憶の系列位置効果
14	日常記憶
15	レポート評価・指導(3)

【履修上の注意事項】

「心理学研究法」「心理統計学基礎」を併せて履修すること。
実験はクラス全員の参加が必須であるため、遅刻・欠席は厳禁とする。各実験ごとにレポートの提出を義務づけるが、提出の期日を厳守すること。自己の健康管理に注意し、積極的な課題への取り組みを行なうこと。
実験テーマについては事前に学習しておくこと。また実験終了後、速やかにレポート作成へ向けて文献探索を行い、実験テーマへの理解を十分に深めた上でレポートを作成すること。

【評価方法】

レポート評価100%で成績を評価する。

【テキスト】

「改訂新版 心理学論文の書き方」 松井豊（著） 河出書房新社 2010
さらに各実験ごとに資料を配布する。

【参考文献】

「認定心理士資格準拠 実験・実習で学ぶ心理学の基礎」 日本心理学会認定心理士資格認定委員会（編） 金子書房 2015

心理学基礎実験Ⅱ

担当教員 山住 賢司

配当年次 3年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 実験

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

2年次の心理学基礎実験Ⅰに引き続き、心理学の主要な分野での実験を実際に体験し学んでゆく。実験手法やデータの解析法、科学的なレポートのまとめ方についてさらに習熟し、より完成度の高いレポートを書けるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

履修者を少人数のグループに分け、グループ単位で下記課題を行う。原則として各実験課題は、①方法説明、②実験実施、③結果の処理と解析、④レポート提出の順に進める。各回は2時限連続で行い、次々回までにレポートの提出を求める。

週	授 業 の 内 容
1	心理学基礎実験Ⅱ ガイダンス
2	実体鏡視による立体視と視野闘争
3	空書
4	認知的葛藤とストループ効果
5	レポート評価・指導(1)
6	一対比較による尺度化
7	概念形成
8	視覚探索
9	連想プライミング
10	レポート評価・指導(2)
11	心的回転
12	文字の同異判断
13	思考過程のプロトコル分析
14	SD法によるイメージの測定
15	レポート評価・指導(3)

【履修上の注意事項】

「心理学研究法」「心理統計学基礎」を併せて履修すること。「心理学基礎実験Ⅰ」の履修を前提とする。実験はクラス全員の参加が必須であるため、遅刻・欠席は厳禁とする。各実験ごとにレポートの提出を義務づけるが、提出の期日を厳守すること。自己の健康管理に注意し、積極的な課題への取り組みを行なうこと。実験テーマについては事前に学習しておくこと。また実験終了後、速やかにレポート作成へ向けて文献探索を行い、実験テーマへの理解を十分に深めた上でレポートを作成すること。

【評価方法】

レポート評価100%で成績を評価する。

【テキスト】

各実験ごとに資料を配布する。

【参考文献】

「認定心理士資格準拠 実験・実習で学ぶ心理学の基礎」 日本心理学会認定心理士資格認定委員会（編） 金子書房 2015